

# スロー・クローズによるソーシャル・イノベーションの意義と可能性

—ガンジー思想を手がかりとして—

大石 尚子

## あらまし

今、日本の衣の自給率はほぼ0%である。食とともに人間が生きる上で必要不可欠なものでありながら、だ。自らの手で衣を一からつくることは想像すらできないであろう。

本稿では、危機的社会といわれる現状を踏まえた上で、今早急に求められている持続可能な社会の実現を可能にするオルタナティブな経済理論を、主にマハトマ・ガンジーの思想を基に検証し、その実現に寄与するのではないかと、いう概念装置として、「スロー・クローズ」を提示する。スローとはslow、クローズとはclothesのことで、具体的には、種から綿を育て、糸を紡ぎ、布を織るという、一連の手仕事を通じて起こりうる社会的効果のことを意味する。ガンジーは、糸紡ぎを人間の自立と平等の象徴とし、自分たちで生活必需品を生産し自分たちで消費するという経済システムによって、相互扶助で成り立つ理想的社会を目指したのである。現代にこの理論を当てはめることは難しいにしても、あるインパクトを持って人に作用し、新たな価値観を創出するきっかけになると考える。

本稿の目的は、ソーシャル・イノベーション研究コースの枠組みに則った社会実験的アプローチという実践研究を通して「スロー・クローズ」の社会的有意性を証明し、問題点を明らかにするとともに、「スロー・クローズ」によるソーシャル・イノベーションの可能性を導き出すこ

とである。そして、これからの社会にどのような形で筆者本人が貢献していけるかを含め、「スロー・クローズ」普及の展望と課題を提示する。

## 1. はじめに

### 1.1 研究の目的

かつて日常着は100%自給自足であった。ところが、高度成長期を経て消費経済が爆発的に拡大し、生産者=消費者 (prosumer)<sup>1</sup> (トフラー、2006)であった時代はわが国でも過去のものとなってしまった。現代の日常生活においては、服は買うものであって、自らの手でつくることなど、想像すらできないのではないか。

産業革命以降、機械制大工業と貨幣経済の発展によって、すべてが貨幣と交換される対象物となるにつれ人間が自らの生活に必要な資財を自ら生産する機会と必要性が激減し、人間の労働自体も商品化、つまり賃労働化された。その中で、人間は、土地との関係の上に築かれた共同体を捨てて都会に移動し、生産するための土地や道具という資本を持たない「無産者」を多く生み出すこととなった。このことが貧富の格差を拡大させ、人間関係は物象化の一途をたどるわけだが、私は、こうした土地と自然と人の分断が、人々が自立的に生きることを不可能にし、ユルゲン・ハーバーマスのいうところのシステム世界による生活世界の植民地化<sup>2</sup> (ハー

<sup>1</sup> 消費者 (consumer) と生産者 (producer) を組み合わせた、未来学者・アルビン・トフラーの言葉

<sup>2</sup> システム領域の認知的・道具的合理性が生活世界の領域に侵入し、生活世界におけるコミュニケイティブな合理性を侵食する事態を招き、システムの権力や貨幣という媒介メディアによって、生活世界内部のシンボリック生産にさまざまな故障や病理が現れてくること。(ハーバーマス、1987)

バーマス、1987)を容易に加速させることとなったと考える。

マハトマ・ガンジー(1869年-1948年)は、機械化の第一の弊害は、機械によって人が依存的になることだと考えた。機械化により、本来自らの手で生産するという人間の喜びであった労働は、賃金を得るために課せられたものとなり、依存的となった人間は慢性的な欲求不満に陥ることとなる。

そこでガンジーが、人々を救うために考えたことは、誰にでもできる糸紡ぎという仕事を提供し、機械に頼らず、自らの手で衣<sup>3</sup>を生産することによって、インドを貧困に陥れている経済システムを変革できると考えた。生産の現場が生活世界から隔離されるにつれて、人は無責任となる。衣・食・住の営みを地域の人々と担い、責任と義務を負うことこそが、社会から貧富をなくし、暴力を追放し、人々が人間らしく生きることを可能にするとガンジーは説く。彼はその中で、真っ先に人々が失った衣の自給を第一に訴え、日常着る物を自らの手で生産することで、自立の精神を培うことができるとした。インドにおいて、綿衣料は一大産業であり、綿花から衣料にするまでの工程には手仕事が必要とされ、多くの人々に労働を与えていた。しかし、産業革命以降、生産の場と生産手段をイギリスに奪われてしまい、その結果、人々は仕事を失い、自らの手で貧困を招いてしまったのである。

現代社会にこのガンジー理論をそのままあてはめることは妥当ではないにしても、今世界は、人間的普遍的道德観の喪失、環境破壊、天然資源の枯渇という危機的状態にある。そのような危機を克服する方策として、現在支配的な成長至上主義的経済システムのオルターナティブを模索する人々は少なからず存在する。そのような代替的経済システムを実現可能にするには、まず環境や資源の有限性を認識した上で、無限の成長を追求する物質至上主義の上に築かれた我々の価値観を変える必要があるだろう。

本稿では、自給率はほぼ0%である衣<sup>4</sup>を、もう一度自らの手で種から作り上げるという行為によって、産業革命以降に人間が得てきたものや失ってきたものを認識し、今の社会の在り方、自分の生活の在り方を見直し、人々が貨幣に換算されない価値を見出し、システム世界に翻弄されない自立的生活を実現するきっかけになり得るのではないか、という仮説のもとに、種から布にするまでを実践し、その社会的有意性を導きだすことを目的とした。日常生活の中の些細な選択の積み重ねの上に、今の成長至上主義的経済システムに翻弄されないオルターナティブな人生があり、その選択こそ持続可能な社会を実現する必要不可欠な要素であると筆者は考える。

## 1.2 研究方法

本研究は、前述した仮説を、社会実験的手法によって証明するという方法をとっている。社会実験とは、地域社会に生起する問題の発見・解決に向けて、実際に地域社会に向けて実験的なアプローチを行うことで、同志社大学大学院総合政策科学研究科ソーシャル・イノベーション研究コース(以下SI研究コース)が定めるプログラムに則り、研究を進めた。

SI研究コースは、「地域社会に生起する具体的な公共問題を解決できる実践能力を兼ね備えた行動型研究者の育成」<sup>5</sup>を目的として開設され、地域社会に根ざした実践研究を進める場としての社会実験施設が学外に設けられている。一つは京都市中京区内にある築80年の京町家「江湖館」、さらに左京区大原に農場と農家「農縁館・結の家(のうえんかん・ゆいのいえ)」が設けられている。社会実験はこの施設を中心に実施し、その経過をエスノグラフィーで記述し、写真撮影・インタビュー・記述式アンケートを行った。また、ワークショップを2度実施し、研究

<sup>3</sup> 織物の表現には「服」「布」もあるが、「服」は着るものに限定され、「布」は用途の定まらない漠然とした織物を指す。本稿で「衣」とは、身にまとう織物全体を意味している。

<sup>4</sup> 織物は化学繊維と天然繊維に分けられるが、科学繊維の原料である石油は100%輸入、また、天然繊維の絹・綿・麻・ウールの中で農水省農作物生産高統計の項目にあるのは養蚕のみで、その売上高も明記されていない。衣服として流通する場合、繊維業界の仕組み上、その原材料の産地を特定して数値化することは難しく、日本絹マークを取得している織物は、伝統工芸品の高級着物、またはいわゆる作家物であり、また、これ以外の天然素材を使用したものもあるが、他の素材と混紡されており、100%国産とは言えない。個人レベルでの手工芸品として存在するぐらいで、一般の産業流通にのる織物としては、原材料が100%日本産の衣はほぼ0%に近いといえる。

<sup>5</sup> 同志社大学大学院総合政策科学研究科ソーシャル・イノベーション研究コースホームページ<http://sosci-si.doshisha.ac.jp>

主題の方向性、研究方法の妥当性、社会実験の方向性、本研究の社会的有意性を問うた。さらに仮説を基にした実践活動は、地域社会においても当事者のニーズに答える形で継続的におこなった。この過程は、仮説証明という研究アプローチから、アクション・リサーチへと変化していった過程でもある。アクション・リサーチとは「常に変化していく社会が抱える様々な問題に対して、研究者と一緒に個々の問題の当事者が自身の解決策を考え、その解決策の有効性について検証し、検証結果をもとにして自身の解決策を修正し、改善していくことで問題解決を目指す調査活動手法」(草郷、2007)である。また、仮説の実証、実践の考察については、ガンジーの理論を基軸としている。

## 2. 「スロー・クローズ」の社会的意義の考察

### 2.1 科学技術の進歩を背景とした現代社会の弊害

産業革命以降、科学技術の発展とともに、貨幣経済の発展に伴い、労働力の商品化、さらに労働過程の合理化による「人間の機械化」<sup>6</sup>が生じ、社会的関係は物象化の一途をたどった。この過程で生じた現代につながる問題は何であったか。

ハーバーマスによると、目標や関係やサービス、それに生活空間や生活時間までが金に換算され、意志決定や義務と権利、責任や依存関係のすべてが官僚制化され、私人的生活態度や文化的・政治的な生活様式を構成する諸要素が、生活世界の記号的な構造から離されるに及んで初めて、貨幣や権力の媒体による機能の被拘束性がますます顕わになってくるという。(ハーバーマス、1987)

近代の合理主義といった思想や科学技術の発展の上に形成された世界で、人間が疲弊していく大きな原因は、庶民が生産する手段をなくしていったことにあるのではないか。ものを生産する術はなく、大量生産を可能にする機械の奴

隷となるしかなく、利潤は資本家に吸い上げられていく一方で、自身はいつまでも貧困から抜け出せない状況で、購買することだけが幸せであると錯覚してゆく。こうして人間は、経済システムに従わざるをえない状況に陥る。

しかし一方で、一面的な近代の見方を批判したハーバーマスが展開しているように、近代における生活世界の合理化は、古い封建的な階級関係の再編成をもたらし、市民社会の発展の基礎となったわけであり、アメリカにおいても、政府の規制や政策によって、従業員は保障され、また、企業利益は国民に再分配されていた。つまり、民主的な資本主義が成り立っていたわけである。だが、現在に至っては、その様相は違っている。

ロバート・B・ライシュは『暴走する資本主義』の中で、今の超資本主義を次のように説明している。今までは、世界の経済を引っ張ってきたのは、国家権力または大企業、資産家といった、一般市民とは明確に区別できる存在であった。しかし、現在は、IT技術の進歩によるグローバル化、巨大サプライチェーンという新しい生産体制、そして規制緩和によって、金融市場を支配するのは個人投資家や一般消費者となり、その姿が一般社会に埋没してしまい、わかりにくくなっている。このことが、これまでの民主的資本主義を消滅させ、資本主義だけを暴走させ、世界にさまざまな危機問題を引き起こしているのだ。

ガンジーは、インドがイギリスによって植民地化されたことを次のように説明している。「イギリス人がインドを占領したのではない。私たちがインドを彼らに差し出し、引き止めている。彼らの銀貨に目がくらんで、彼らに手を貸し、彼らの品物を買ったのは誰であったか。まぎれもなく我々である。金持ちになろうとして、両手を広げて彼らを迎え入れたのだ。」(ガンジー、1999)

今、これと似たことが起こっている。つまり、自分たちの生活を締め付けているのは、自らの消費行動であり、その消費行動によって、吸い上げられた利益は自動的に個人投資家に入る。

<sup>6</sup> ルカーチは、生産の合理化を図るには、その労働過程において伝統的な結びつき方をしている経験的な労働の体験に基づいている生産方法はやめねばならず、生産工程を分解し合理化しなければならないのだが、この分解された部分作業には、労働者の人間的な個性や特性といったものは必要とされず、それどころか、「過ちを犯す源」となり、人間は、労働過程の本来の担い手として存在するのではなく、機械化された一部分として一つの機械システムの中に編みこまれる、と指摘した。(ルカーチ、1998)

企業や国家といった組織であるなら、社会的責任も追及しやすく、その利潤の吸い上げにも歯止めも利くが、一般消費者に埋没してしまっている投資家となると、攻撃の矛先が定まらず、また、投資家本人も無責任でいられるのである。

さて、ここまで、無限の成長を目指して発達してきた産業資本主義と人間のかかわりを見てきたが、ここで考えるべきことは、この成長は、資本となる代替不可能な自然資源があってはじめて可能となるということである。このことを改めて念頭に置き、産業資本主義の発展の果てに、今我々が直面している危機について考察する。

シューマッハは、現代の危機を、環境、資源、人間の危機と3つに分類しているが、そのどの原因にもなっているのは、ベックも『危険社会』の中で指摘しているとおり、高度に細分化された分業体制のシステムであり、その上に成り立つ我々の生活様式である。どの環境問題においても、誰の責任であるか追求不可能である。エネルギー資源の枯渇においては、「システム上不可避で不可逆的な被害を引き起こし、人間全体に対する包括的な危険」(ベック、2006)をもたらす原子力に安易に頼ろうとする。また、物質的生活水準の向上や社会保障の充実により、社会の中で人間はますます個人化し、社会関係は、あらかじめ与えられるものではなく、個々人が都合のよいような関係性を作り出す。そこにコミュニケーション能力を培う余地はなく、社会的隔離が生じているといえよう。今若年層におこっている社会病理現象、例えば引きこもり、自殺、幼児虐待、無差別殺人、親子殺人といった問題は、個人化に伴う社会的隔離が原因となっていることは否定できないであろう。生活世界にあるはずの親密性やコミュニケーション性は影をひそめ、システムの支配をダイレクトに受け、目前の危機的状況に個人で対応しなければならないのだ。

## 2.2 オルターナティブな経済システムの示唆

前節の3つの危機を踏まえ、今は、人間が人間らしく生活できる、持続可能な社会を実現するための施策なり活動が最重要である。自然資源の有限を実感し、自然と調和した生活を営むことが可能なオルターナティブな経済システムの構築を目指すことは、その実現のための必要条件であるといえる。パーマカルチャー<sup>7</sup>や、エコビレッジ<sup>8</sup>などは、今の超資本主義の上に確立された経済システムに代わるオルターナティブを模索する活動であろう。

確かに、小さな地域での自給自足的生活の実現は、自然と共生し人々と協働する中で、自然の一部として存在する自分を知り、人間の理性、倫理観は培われ、自己実現してゆくことが可能にし、持続可能な社会を構築することができるであろう。しかし、自給自足という生活様式は、今の社会システムからすぐに移行するにはハードルが高すぎる。まずは、今の社会生活を続ける中で、オルターナティブな生活様式の必要性和可能性を、効果的にそして継続的に人々に提示する装置が必要である。

そこで、筆者が提示するのは、「スロー・クローズ」の実践である。スローとは、英語のslow、クローズとはclothes、つまり、「スローな衣」の実践ということであるが、これは布を種からつくるといふ、衣の完全自給の活動を通してソーシャル・イノベーションを導く試みである。

## 2.3 ソーシャル・イノベーションとしての「スロー・クローズ」

今生活世界の中での生産活動というのは極端に減り、毎日の人間の生活に欠かせない食さへも外部化されている。衣に至っては、完成品を買うことが当然とされ、種から育てて布にする

<sup>7</sup> パーマネント(永久的)とアグリカルチャー(農業)あるいはカルチャー(文化)を組み合わせた造語で、オーストラリアのビル・モリソンとデビット・ホルムグレンが構築した人間にとっての恒久的持続可能な環境を作り出すためのデザイン体系のことである。その狙いは、一生態学的に健全で、経済的にも成り立つ一つのシステムをつくり出すことである。自然のシステム・伝統的な知恵や文化・適正技術を基本要素に、田舎でも都会部でも生命を支えてゆけるようなシステムをつくり、人間の生活をそれに組み入れることにより、自然の豊かさ(生産力、多様性)と人間の生活の質(物質的豊かさよりも精神的豊かさのある生活)を共に向上させることを目指している。

<sup>8</sup> 都会でもあるいは田舎でも、お互いが支え合う社会づくりと環境に負荷の少ない暮らし方を追い求める人々で作るコミュニティのことで、パーマカルチャーや環境にやさしい建築、植物の栽培や代替エネルギー、コミュニティ形成の訓練等多岐にわたった活動を行っている。

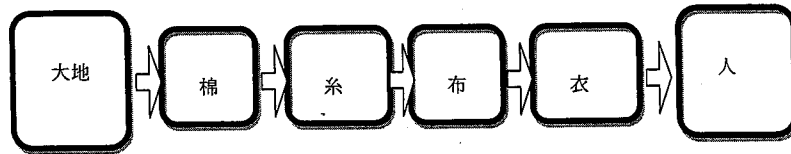
ということは、想像すらできないであろう。「スロー・クローズ」の実践とは、その試みである。しかも、今の生活環境を変えずに、である。

自給自足的生活をすぐに始めることは難しいが、布をつくる中心的作業となる糸紡ぎは、簡素な道具さえあれば、住居環境を変える必要もなく、現状の生活の中で出来る作業であり、大した体力もいらない。そして、原材料となる綿は、家庭のプランターで栽培可能である。つまり、現状の生活の中で、自然からの恵みで糸を作り、それを布にしていくことが可能なのである。この一連の作業を通して、大地と人とのつながりを回復し、もの=消費の対象という、今の人々のものに対する価値観を変革させることが可能ではないか、また、これまで無駄と排除

されてきた人間の本質を取り戻すことができるのではないかと考える。そのサイクルを以下の図にまとめた。

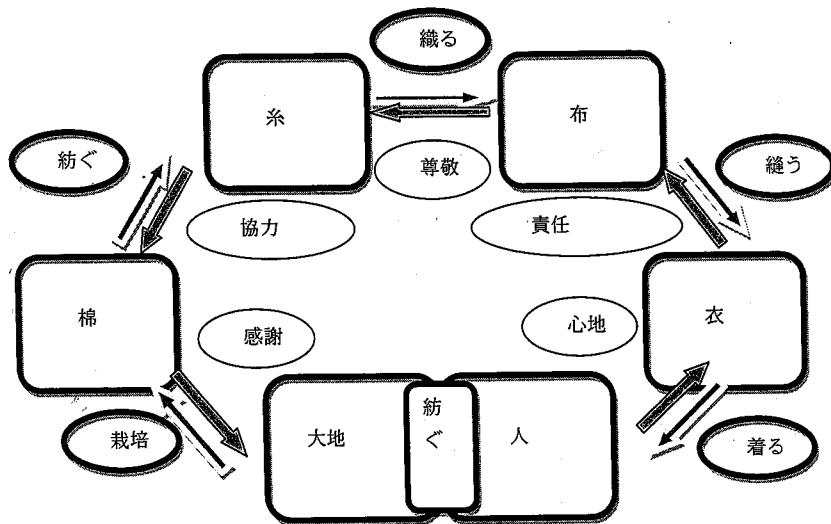
始めに断っておくが、「スロー・クローズ」で扱う布の素材は綿である。綿が一番人の肌に直接触れるのに心地よい素材であり、人類がその魅力に取りつかれ、綿製品の普及を目指して産業革命がはじまった歴史があり、現在でも繊維製品の中で最も消費されている素材であることが理由である。

まず、図1は今の衣の生産の有り方を示している。大地で育った綿が、我々の手に届くまでに、綿の収穫から服になるまで多くの工程を踏まねばならない。それぞれの工程は分業化され、我々の目の前に現れた時には、衣が農作物であるこ



大地と人類の分断された関係

図1



スロークローズによるソーシャルイノベーション

図2

とは誰も想像できない。大地と衣、そして、衣を着る私たち人間との関係は分断されているのである。この生産工程は、布に限ることではなく、現代の商品の性格を象徴しているといえるだろう。この分離こそ、人間の無責任な行動を招いている。

ここで図2を参照していただきたい。まず、図下真ん中に位置するのは「大地」と「人」そしてその間に「紡ぐ」という作業を据えている。これは、大地からの恵みである綿を人間の手によって糸にする「紡ぐ」という作業こそ、人と自然をつなぐ一番重要な行為であることを意味している。この「紡ぐ」を起点にして、衣の自給は一つのサークルを作り出す。そして、その全行程に人間の英知と人間性を取り戻す要素が組み込まれている。

まず、綿の栽培によって、大地の循環を知り、その恵みへの感謝を引き出す。そして綿から衣にするために必要な糸をつくるには、多くの紡ぎ手が必要となり、人との協力が生まれる。

織る工程では、織り機という糸紡ぎ機より複雑化した道具の扱いや、どのような風合の布を織るかで変わる緯糸・緯糸の密度から使用する糸量を割り出す計算、布のデザインによって染め分ける技術など、より良い布を織るには、細かな工程それぞれに技と鋭い感覚と、計算能力が必要となる。ここに自己実現の可能性と人に対する尊敬の念が生まれる。裁断、縫製という段階では、着やすさ、強度、デザイン性など、機能性とファッション性が重要となり、製作者の責任がより大きく問われることとなる。そして最後に、人が衣をまとう時、良いものであれば気持ちいいと感ずる。そして、その気持ちよいいということこそ、大地の享受であり、人間の英知の積み重ねりであることを理解した証となる。

「スロー・クローズ」の実践は、この一連のサークルを全て体験することであり、その体験によって、上記に述べた人間的要素を取り戻すことができるのではないかと。そして、個人個人が今の生活の在り方を見直し、これからの生き方を考えるきっかけとなるのではないかと考える。また、衣の自給を通して、分断された人間関係が修復され、協働してゆく場を創出させることができるのではないだろうか。

今の不確実な社会に不安を抱え生きる人々だ

からこそ、大地で育んだ素材で自らものをつくり出していくという、大地との関係における直接性が、生きていく上でのある種の自信を与えてくれるのではないかと考える。

### 3. スロー・クローズの定義

#### 3.1 人類と衣の関係

近代の幕開けといわれる産業革命は、綿業によって起こったともいわれる。イギリスでは機械化によって綿織物の大量生産が可能となり、インドを植民地化して一大産業を奪い、国民を奴隷化し貧困に陥れた。アメリカにおいても、南北問題の象徴とされるように、奴隷問題が深刻化していった。日本では、「綿の導入は連鎖的に商品経済を発達させ、経済社会の在り方そのものを大きく構造的に転換させたのである。」(永原、1990)が、流通の発達と機械化は、農民の労働を苛酷にし、また、問屋の吸い上げによって生産者の隷属をまねいたのである。

綿業の発展に伴って、機械化による大量生産、商品流通の発達によって貨幣経済が発達する中で、一部の者には多大な富を与える一方で、原料生産地域からの資源の収奪が進み、多くの貧困層と隷属を生んだといえる。こうした歴史的事実は、グローバル化が進む現代社会の現状と重なり合うところが多々あることは否定できないであろう。

では、現在の世界の綿の事情はどうであろうか。

綿花の栽培には大量の農薬や殺虫剤が投与される。Organic Trade Association (以下OTA)の調べによると、世界の綿花生産地は全耕作面積の2.4%にすぎないにもかかわらず、世界中で使われる殺虫剤の25%、農薬の10%が使用される。また、使用される殺虫剤・農薬の上位15種類のうち、実に7種類までが発癌性ありとされる薬品である。

しかし、1990年代に入ると、消費者の食の安全を求める声の高まりと農民の農薬による健康疎阻害や土地の弊害に対する反省から有機農地への転換が進められ、綿作農家も有機栽培に加わった。2005-6年から2006-7年にかけて、オーガニック・コットンの世界の生産高の伸び率は

53%で、売上高は5億8300万ドルから26億ドルと飛躍的な伸びである<sup>9</sup>。まだ生産高としては微々たるものであるが、近年の生産量と関連業の伸びは目覚ましいものがあり、消費者の関心の高まりとともにますます需要は増えるものと思われる。しかし、その一方で、遺伝子組換え種の普及が猛烈なスピードで進んでいる。2007年、世界中で綿のGM種の作付面積は43%で、アメリカにおいては86%、中国においても58%に達するといわれている<sup>10</sup>。知的所有権が遺伝子操作の分野に認められると、モンサント社に代表されるような特許システムを利用して利益を得ようとする大企業が種子市場へ参入し、現在、知的所有権による種子の独占が問題となっている。インドの女性活動家ヴァンダナ・シヴァは、こうした生物多様性を私有財産化する略奪行為を、「コロンブスの再来」と表現し、西洋が行った植民地化は、現在「遺伝情報」という「生体内部空間」で起こっていると指摘する。(シヴァ、2002) また、オーガニック・コットンの栽培にしても、生産高を上げ、生産コスト削減を図るために、低賃金労働や幼児労働といった問題を抱えている。

このように、綿の栽培の現状は、労働者問題、農業による環境汚染、種子産業により農民をさらに困窮させ、生物多様性を破壊するという現代社会の問題を浮き彫りにしている。

### 3.2 衣の自給の経済理論

シヴァは、「生物多様性の捜査と独占が行われている今日、種子が『自由の場』かつ『自由の象徴』となった。つまり、種子は自由貿易による再植民地化の時代において、ガンジーのチャルカ(糸車)の役割を果たす」(シヴァ、2002)と述べているが、非暴力・不服従の運動で有名なガンジーは、糸車を平等・平和・自立の象徴とした。自分たちの手で糸を紡ぐことの真意は、「機械による大量生産ではなく、人の手によって、自分たちが生きていく上で必要な食糧や衣類を生産し、使用すること」であり、

そうすることによって、人々は限界を知り、競争ではなく協力するようになり、「スワラージ」(自治)が実現すると説いた。「スワ」とは自分、「ラージ」とは治めるということを意味し、自らを支配する、つまり自立することによって本当の自治が可能となり、そうした社会の実現には、まず教育が変わらなければならないとガンジーは言う。本から得る知識よりも、労働を通して知性を磨くべきだとした。ガンジーは「知性を磨く最短の道は、科学的なやり方で職人技を体得していくこと。なぜ、このような手の動き、道具の使い方が必要かを、各段階でおそわることが、知性を磨いていくのだ。」という。(片山、2006) また、「人を幸福にする鍵は労働にある」とした。つまり、自らの手と体を動かし、生活に欠かせないものを作るような建設的な仕事に従事することこそ人間の喜びであるという。「労働を通してこそ人は本当の喜びを味わうことができるのだというのがガンジー思想の真髄である。」(片山、2005)と片山佳代子<sup>11</sup>は述べている。

糸車を平等の象徴とするのは、糸紡ぎが、土地を持たなくても家内で可能で、特別の技術を必要とせず、弱者でもできる仕事であるからだ。人が貧困になるのはお金がないからではなく、生きる上で欠かすことのできない食・衣を生産するすべを失うからである。つまり、一部の人間にしか仕事を与えることのできない機械による大量生産ではなく、人の手で糸を紡いで衣類を生産することは、人々に平等に仕事を与え、隷属することなく自立して生きることを可能にする。これが、糸車を平等と自立の象徴とする理由である。

では、現代において糸を紡ぐとはどういう意味があるだろうか。

まず、現代の人々にとって、衣類は買うものである。当たり前だと思うであろう。しかし、糸を紡ぎ、衣を自分の手でつくることを知ると、当たり前前に目の前にあることが実はそうではないことに気付く。例えば衣類は土からできている、であるとか、繊維から布にするまでに非常に手間がかかること、それなのに、街中ではタ

<sup>9</sup> Organic Trade Association ホームページ、[http://www.ota.com/organic/mt/organic\\_cotton.html](http://www.ota.com/organic/mt/organic_cotton.html)

<sup>10</sup> International Cotton Advisory Committee ホームページ、[http://www.icac.org/cotton\\_info/publication/press/2008/english.html](http://www.icac.org/cotton_info/publication/press/2008/english.html)

<sup>11</sup> 『ガンジー—自立の思想』を翻訳し、ガンジーの哲学に精通し、自らも各地でガンジー哲学について講演や糸紡ぎの体験会を開催している平和運動家

オルが100円ショップなどで安く売られていることの不自然さ、昔は皆衣類も自給していたこと、衣類も自分たちで作れるのだということ、体を使ってものを一からつくる楽しさ、糸から布をつくるには大勢の人の手が必要で、協力が必要であること、人の手で作る量の限界、などである。

今は、お金を出せば何でも手に入る。しかしそのことが返ってお金への執着を招き、失うことへの不安と恐怖心に駆られて、将来に希望が持たず、無責任になってしまう状態に陥っていると筆者は考える。糸を紡ぎ、布を作ることによって人間にとっての仕事の原点に立ち返ることができるのではないだろうか。

### 3.3 スロー・クローズの定義

ここまで、衣と人との深いかかわりと、衣と自然との関係を探ってきた。ここで、筆者が研究を進める上で「衣の自給」でなく、「スロー・クローズ」という造語を使用したかについて、「スロー・クローズ」の言葉を定義するとともに明らかにしたい。

日本で「スロー」という言葉が使われ始めて10年以上になるだろう。今やこれからのライフスタイルを考える上で欠くことのできないキーワードとなっているが、そのきっかけとなったのは、北イタリアの小さな町ブラで起こった「スローフード運動」であった。

ファーストフードに対抗して生まれたこの運動は、無駄を省いた合理的生産や利潤追求による大量生産・大量消費、効率ばかりを求める「ファスト」な現代の人間の生活様式に疑問を投げかけ、食の歴史、地域性、文化性、そしてそれを食す喜びを残していこうとするもので、このスローフード協会の活動は、今や食を通じて世界平和を目指す活動にまで成長をとげた。

「スロー・クローズ」という名称をつけたのは、このスローフード協会の躍進にあやかりたいという願いがないとは言えないが、何よりも、協会が提唱している「良い食べ物」の定義と、「良い布」の定義が一致するからである。以下に、スローフードが提唱する「良い食べ物」の定義を紹介する。

会長カルロ・ペトリーニが「良い食べ物」の

条件として挙げている3要素がある。buono (おいしい)、pulito (きれい)、giusto (公正) である。

彼は著書『Buono Pulito e Gusto』の中で、おいしいとは、食べておいしく、考えておいしくなければならないといっている。ペトリーニが定義するbuonoな食材とは、日常食べるもので、まず本来の味を有しているということ、そして、その食材が地域に根差したものであるということである。おいしさは、ある土地の文化を象徴するものであり、また、そうした味を有したものがおいしいものだとしている。そして、地域性を持ったものを、おいしいと感じることで、他の文化を尊重し、また、文化交流になるとペトリーニは主張する。調理法についても、伝統料理は、自然に備わった本来の味を有しながら、それを生かした調理法で調理された料理であるからこそおいしいのである。このように、おいしいという概念は、大地と異なる文化を大切に、尊敬することになると説明している。(Petrini,2005)

布についても同じことがいえる。天然繊維にしても、地域でその性質が異なり、また、染色法や、織り方もそれぞれの土地に独特な技がある。そして、それぞれ特徴をもった素材感がある。これを日常の中で使用してこそ文化を守ることになる。

次に、pulito (きれい、清潔) であるが、これは、大地や環境に対してきれいである食材を意味する。つまり、その食材が農地から食卓に届くまでに、自然資源を汚染していない、破壊していない、過剰使用していないということである。これは、食物が持続可能な方法で栽培され、加工され、運搬されているかということである。ペトリーニは良い食を定義する上で、持続可能性を最重要事項とし、buono, pulito, giustoのすべてにおいて必須要素だと述べている。(Petrini,2005)

最後に、giusto (公正) であるが、これは食物が社会的に正しく生産されているかどうかということである。つまり、生産が社会的、経済的に持続可能であることが必要だということである。社会的な持続性とは、農民の人間性が守られているかということである。(Petrini,2005)

以上が、スローフード協会が提示する、良い食の条件であるが、衣の世界において、売られている洋服で全ての条件を満たしているものは



ないだろう。それほど、衣類が人の手から離れているということであるが、だからこそ、今自分たちで糸を紡いで作ってみるという試みは、自然から離れるにつれて、人間が失ってきたものを認識し、自らの生活を見直すきっかけとなりえると筆者は考える。

まとめると、「スロー・クローズ」とは、buono, pulito, giustoの条件を満たした衣、もしくはそうした衣を作り出すこと、また、その活動自体を意味することとする。

#### 4. スロー・クローズの実践

本章では、「スロー・クローズ」の概念に基づき筆者が行った実践活動と社会実験について記述する。

##### 4.1 社会実験1種から糸への試み

###### 4.1.1 概要

実験の趣旨は、綿の栽培から収穫、そして実

際糸にするまでを体験することが、子どもや大人にどのようなインパクトを与えるのか、また、認識、価値観、行動にどのような変化を生むのかを観察することで、衣の自作・自給という「スロー・クローズ」の可能性を明らかにすることであった。実施期間は2007年、2008年、フィールドは、京都市左京区大原地区にある学外社会実験施設「農縁館・結の家」とその農地で、すでに展開されていた、「食育ファームin大原」<sup>12</sup>（以下食育ファーム）と連動する形で、衣と食をトータルで体験するプログラムを実施した。

糸紡ぎ体験の実施は、2007年、2008年とはほぼ同じプログラム内容で行い、フィールドワークは綿の種まき準備から、収穫、その収穫した綿を使つての糸紡ぎ体験まで両年4月から11月までで、対象者は食育ファームの参加者とそのスタッフとした。

糸紡ぎ体験会は2007年は10月と11月の2回、2008年は11月に行った。同志社小学校の1学年から3学年の親子が延べ66人参加し、2007年は、糸紡ぎの技術指導には筆者本人と、事前に講習を受けてもらった同志社大学院生5名が当たった。

##### 体験プログラム内容

使用道具	糸車5台・綿繰機2台・弓5本・カセ上げ機1台
材料	収穫した綿3種類・打ち直しインド綿
作業内容	収穫した綿の説明、綿の収穫、種繰り、糸紡ぎ

##### 作業工程

時間	内容
10:30	収穫した綿の説明・糸紡ぎの実演・指導
11:00	グループに分かれて糸を紡ぐ
12:30	昼食
13:00	畑で綿の収穫
13:30	綿の種とり作業・弓うち作業の実演・指導 各自自由に作業
15:00	終了・解散

<sup>12</sup> 2006年からスタートした、農作業、収穫、料理、おもてなしまでを体験する総合的食育実践プロジェクトで、参加者は同志社小学校の親子を対象としている。

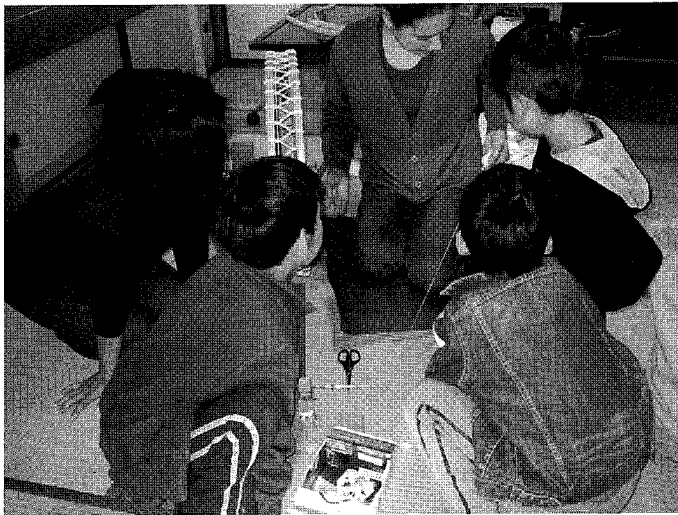


図4 糸紡ぎの様子 (2007年10月21日撮影)

#### 4.1.2 考察

記述式アンケートでは、大人24名中20名から回答があった。感想として、珍しい体験ができてよかったにとどまるところもあるが、「次は織りを企画してください。」「編めるぐらいに量を増やしたい。」といった発展的な意見や感想も少なくなかった。子どもたちの感想としては、いろいろな綿の種類があることや、綿から糸になるところに驚きを感じ、また、自由欄には、道具が多く描かれていた。これは、道具の形状やメカニズムを、注意深く観察していた証拠となるだろう。

写真には親と子、親同士が糸道具に肩をならべて共同作業をする姿が多く映っているが、幼い子とその親たちが、綿や糸車の「つむ」の先に視線を重ね合わせる光景には、北山修のいう「共視」<sup>13</sup>を見て取ることができるのではないだろうか。やまだようこは、人と人とのコミュニケーションは人と人との間に「共通のもの」を作り出す共同化の営みであり、「共に見ること・語ること」はその根幹を作る行為であるとしている(北山、2005)が、この糸を紡ぐ一連の作業の中には、その要素を多く見てとれることができる。

昼食の時間も惜しんで紡ぐ子どもたちや、子どもそっちのけで糸車に向かう大人たちの様子から、参加者が作り出すことの喜びを実感したことは確かである。また、糸紡ぎを通して、様々な学びがあることを理解したという感想が多かった。綿の収穫と種類の違いをみることで、地理と農業を学び、おもちゃでなく本物の道具を使い、そのメカニズムを知ることで、先人の英知と科学を学ぶことができるという認識を参加者が抱いたことは、前述の仮説の実証にもつながることと言えよう。

糸紡ぎの体験は、男女年齢問わず、参加者の認識や価値観に少なからず実質的なインパクトを与えた。子どもについて言えば、好奇心から学習に向かわせることができ、しかも能動的・主体的学習に取り組む動機ともなり得るのではないか。また、大人においては、ものづくりの喜びを感じ、子どもに教えられるものが得られたという自信、頭で考えることと実際やることの違いを理解することができるという点である。

また、糸を紡ぐという一つの目的のために、親子が同等の立場で協働する場が創出されたことは興味深い。そこには目的を共有することから生まれる一種の連帯感があった。糸をつくる

<sup>13</sup> 北山は「共視」について「母と子、対象からなる三者の構造こそ、象徴を共有し言葉を理解し、考えるようになっていくための基盤となる。そして、繰り返される共同作業は言語習得と文化継承、そして思考の伝達という機能の意味でも重要である」としている(北山、2005)

という共通目的に向かいながらそれぞれができる作業に専念することが、個々の作業次元のみならずホリスティックな達成感を生み出し、親密で居心地の良い雰囲気を生み出したと推測する<sup>14</sup>。

## 4.2 社会実験2糸から布への試み

### 4.2.1 概要

ここでは、社会実験1で種から糸にするまでを体験した親子を対象にして、社会実験2として、糸から布にする体験会「紡いだ糸でチビマフラーを織ろう！」についての概要を述べ、考察をしている。

実施目的は、種から糸へする工程を経験した親子が、今度は身につけるもの、つまり完成品をつくることで、何を学びとるかを観察し、「スロー・クローズ」の社会的有意性を考察する。実施会場としては、SI研究コースが保有するもう一つの学外実験施設である京町家「江湖館」で行った。

布を織るには、糸準備、染め、織りという工程を踏まなければならないので最低3日間が必要となる。したがって実施時期は小学校の夏休みを利用した。実施日時は2008年8月26日～28日、場所は26日と28日は「江湖館」で、27日の糸染めは、京都市左京区大原にある草木染め工房「大原工房」にて実施した。参加者は、「糸紡ぎ体験in大原」に参加した同志社小学校生親子4組（母親4名・子ども7名）であった。

#### プログラム内容

使用道具	糸車4台、種繰り機1台、弓3本、機織り機1台
材料	収穫した綿、打ち直しインド綿

#### 作業工程

日時	作業内容
26日	糸紡ぎ、機織り準備
27日	紡いだ糸をそれぞれに草木で染める・草木染めの講習
28日	親子一組づつ順番にちびマフラーを織る



図8 綜統通し（機織り準備）（2008年8月26日撮影）

<sup>14</sup> この社会実験のより詳しい結果と考察は「衣の自給の社会的意義と可能性—実践活動『糸紡ぎ体験in大原』を通じて—」（『同志社政策科学研究』第10巻（第2号）、同志社大学大学院総合政策科学会、2008年）を参照されたい



図9 ちびマフラーを織る (2008年8月28日撮影)

#### 4.2.2 考察

糸紡ぎ体験会の時は、糸を紡ぐ、という行為そのものが不思議で珍しく面白かったので、一時の楽しみという性格が強かったが、糸から織りまでを経験すと、かける時間の長さや、布ができるまでに様々な工程を必要とすること、また、それぞれの工程に必要な人間の技に触れ、実感することによって、特に母親たちの洞察は深まった。

また、布をつくる全行程のクライマックスである「織る」という行為は、今まで努力したことが、形となって現れる瞬間であり、「早く替って」と親子とも織る順番の取り合いをするほど非常に楽しんでいた。

糸紡ぎ体験会で得られた成果とほぼ同じことがこの織りの場合も得られたが、さらに特記すべきは、糸紡ぎのように造りっぱなしではなくて、作ったものが自分が日常使うものとして残ることだ。参加者の会話や行動から分析し、糸紡ぎから布にするこの体験を通して得られたことを総括すると以下ようになる。

- 1) ものの大切さを知り、同時に日常気づくことのない人間の叡知に触れることができた。
- 2) 頭でわかっているのと、実際やってみるのでは違うということを感じることができた。
- 3) ものをつくることの楽しさを知ることができた。
- 4) 種から布にするまでを全て一人でやることは非常に労を要するし時間もかかる。多くの人々と協働することで、物はできていくことを体感することで協力することの必要性を知ることができた。

- 5) 親子の自然なふれあいが生まれ、作業中はどちらが上ということはなく、お互いに出来るところを補いながら、創造的かつ建設的な時間を共有することができた。

織りものにするには、糸をつくるよりさらに多様な作業を必要とする。これは、多くの人々の手が必要となると同時に、体力がなくても、手先が不器用であっても、全ての人に仕事を与えることができるということである。また、成果物はそのまま毎日の暮らしに使える必需品である。日常に必要なものを、人々の協力によって自分たちの手で作ることができる。

生活必需品を自給する試みの中で、人間関係が育まれる。ここに、スロー・クローズ・コミュニティ創出の可能性を見出すことが出来る。

#### 4.3 地域コミュニティでの実践活動

ここでは、筆者が2007年6月から地域コミュニティで継続的に行ってきた糸紡ぎから織りまでのワークショップの実践記録を通して地域における「スロー・クローズ」の将来性を明らかにしたい。

##### 4.3.1 概要

実践の場となったのは、大阪府吹田市にある、コミュニティ・ネットワーク団体「モモの家」である。昭和初期に建てられた古民家を拠点とし、今の衣・食・住の在り方を見直し、何故人にとって必要なのかを考え、次世代に伝えてい

く生活の在り方を提唱していくことをミッションとし、年中ほぼ休みなく様々なイベントやワークショップを企画し、運営している。

2007年7月から現在まで、月2回のペースで糸紡ぎワークショップを行い、その間に、フォーラムやお祭り、里山、展示会先などで単発的な糸紡ぎワークショップを11回開催した。ワークショップでは、主婦、学生、会社員、卸市場職員、公務員、教員、NPOスタッフ、飲食店経営者、知的・身体障害者など、その時々でさまざまな背景をもった参加者と出会い、布についての意見交換をしてきた。また、「モモの家」の会議に参加し、都会の暮らしの中で糸を紡ぐ意味について、そしてその重要性についてスタッフとともに議論を重ねてきた。そうした中、現在では、糸紡ぎが、「モモの家」の活動の中核を担うものとして位置付けられるようになり、糸紡ぎをする風景が「モモの家」では日常となっている。

#### 4.3.2 考察

筆者は会話の中で「なぜわざわざ糸を紡ぎにくるのか」と問いかけるのだが、「こどもと一緒にできる」「毎日の追われる生活から抜け出せる。」「自分をリセットできる。」という答えがかえってくる。参加者の中には、自分で糸車を購入したにも関わらず、遠くからわざわざ習いに来る人も少なくない。なぜかと尋ねると、「紡いでるこの風景が好きやねん。」

多くの参加者が、その場と時間の共有を求めていることがわかる。

「モモの家」に糸を紡ぎにくる人々を分類すると、①イベントなどで体験して②環境教育に関心がある③農に関心がある、または、農的暮らし実践者、に分けられる。また、様々なイベントで出会う人々との間で、「綿の種を分けて欲しい」という人も少なくなく、また、前年に差し上げた種からとれた綿だと、わざわざ持ってきてくれる人もいる。活動をする中で、綿を栽培し、衣の自給を考えようとする人とのネットワークも発足し、和歌山、奈良、京都へと広がりつつあり、実際に現地での糸紡ぎワークショップの依頼を受けている。

## 5. スロー・クローズによるソーシャル・イノベーション

ここまで本稿では、「スロー・クローズ」によるソーシャル・イノベーションの可能性を論証し、その仮説に基づいた実践活動の考察を行った。ここではその結果を踏まえて、スロー・クローズの社会的有意性を総括し、今後、「スロー・クローズ」を社会の中でどのように有効に活用できるか、その可能性と課題、そしてこれからの展望を述べる。

### 5.1 実験結果の評価

綿の栽培、糸紡ぎ、染め、織りを体験する「スロー・クローズ」の実践において行ってきたフィールドワークと記述式アンケートを整理すると、どれにも共通する3つの要素が得られる。

まず一つ挙げられるのは、人の好奇心を掻き立て、能動的に多くの知を得られるということである。糸ができる瞬間は手品のように見え、人に非常にインパクトを与え、印象づける。そして、糸紡ぎでは、うまく紡ごうとする工夫する中で、道具のメカニズムを徐々に理解し、科学を学んでゆく。織物の設計では密度や糸量などの計算、また、綿の栽培では、産地によって綿の性質が異なることや、日本では和綿のほうがアメリカ綿より栽培しやすいことなどから、風土と人間の生活の関係の深さを知る。また、一見単純に見える中に集約された技に、先人の英知を実感し、その進歩の中に歴史を学ぶ。さらに、糸紡ぎや織りの作業は、人の集中力を高める。つまり、衣を種からつくることを通して、本から得るような暗記の知識ではなく、体を通して、無意識のうちに自ら求めて知を得ることになるのである。

こうした教育的要素は、受動的に与えられるばかりの現代の教育に欠けていることである。自分の生活に欠かすことのできないものを作ることを通して得る知識は、つまり、実生活で生きる知識であり、大きく言えば、生きるための知でもあるだろう。

次に挙げるのは、衣の自給は、コンヴィヴィアルな空間を創造する可能性があるということだ。コンヴィヴィアルとは、現代産業社会文明

を鋭く批判分析した哲学者・イヴァン・イリイチの言うコンヴィヴィアリティの要素を持った、という意味である。人々が、ヴァナキュラー（土地が伝統的に有するもの）な領域を踏まえて、倫理的な人間関係を保ちながら共生することと筆者は解釈する。糸紡ぎや織りの体験会では、普段では一緒に居合わすことのないような人々が、言葉を交わしながら、協働する場面が多く見られた。布ができるまでに、様々な作業工程があり、それぞれの役割分担が自然に起こる。老人でも、こどもでも、障害者でも何か役割を担うことができ、同じ空間に過ごすことができる。また、商品化を目的としない生産活動は、効率性、生産性を求められない。そうした条件下では、友愛、厳しさ、愉しさといった倫理観が培われる可能性がある。また、機械による生産ではなく、人間の手の技による生産は、土地利用の限界を知り、人と道具と自然の関係性を教えてくれる。

ところで、現代のようなシステムに支配される以前の生活世界では、例えば、料理、味噌作りといった生産活動が多く営まれていた。だからこそ、全人的な経験を与えてくれる、人間形成にとってかけがえのない「共鳴板」（中岡、1996）であった。衣の自給は、人々との協働を必要とするので、公共圏における生産活動と捉える事ができる。言語的コミュニケーション能力が著しく低下してしまった今、植民地化された生活世界を取り戻すには、コミュニケーション手段として生活世界における生産活動を活発化させていくことが必要である。

さて、3つめの要素とは、「癒し」の効果である。アンケートの回答には、綿自体が持つ心地よさと、糸紡ぎという単純な作業の中に、心の平安を見出していることがわかるものが少なくなかった。綿の感触については、99%以上の人が、心地よいと答えているし、ある子どもは自分の持ってきたぬいぐるみを綿でくんで寝かしつけていた。また、大人でも、綿のかたまりを頬ずりしたりと、綿の魅力が世界を動かしたほどであるから、人類にとって一番親しい素材なのである。また、綿の収穫においても「癒される」という感想をもらう。だからこそ、無償でも綿の栽培に協力してくれる農家が少なからず存在するのだろう。

まとめると、衣を一から作るという行為には、

資本主義の暴走によって排除されてきた人間の本質に気付かせてくれる要素が多く含まれており、これからの社会で個人がどう生きてゆくのかを考える上でも、正しい方向に向かうためのツールとなり得る。そして、個人がその気付きと考えることを繰り返し、社会との交流の中で自己の考えの正当性を確認しつつ、コミュニティを形成していうことによって、ソーシャル・イノベーションは可能となると考える。

## 5.2 展望と課題

ここでは、SI研究コースのカリキュラムに則った2度のワークショップを通じてこの研究活動を実際どう有効に社会に還元できるのかというこれからの展望と課題を導き出したい。

第1回目は、2007年3月、幼児教育、繊維企業、地域コミュニティ、植物栽培、染織といった異なる分野の専門家に参加していただき、筆者の指導教員をはじめ、大学院関係者も同席していただいた。結果として、「スロー・クローズ」の活動を広めるに必要なことは、ひとつは、学校教育に繊維教育のカリキュラムとして取り入れてもらうような活動をする事。もう一つは、筆者が率先して手紡ぎ手織りの作品をつくり、自らも技術向上することによって、より多くの教授できるものを増やし、またより良い作品の発表によって手紡ぎ手織りの衣の社会的地位を確立させ、手紡ぎ手織りの社会的評価の向上に努めること、であった。また、衣を着るということには、単純に外気から身を守るということや、自己表現の手段ということよりもっと大切な意味があり、自然のいのちをまとうということであることを教えられ、大量破棄される現代にあって、人間にとって「衣をまとう」本来の意味を伝えていくべきという意見をいただいた。

第2回目は2008年12月に、「自立・自給型生活論」という大学院講座の一環としておこなった。小さな地域内で自給自足し、自治していく「系内自給」という考え方を通して、今後の生き方を議論するこの講座の趣旨と、筆者の研究目的が非常に近いので、衣の自給を講座のテーマに加えてもらい、受講生に種繰りから織りまでを体験してもらった上で、現代社会における

「スロー・クローズ」の有意性について議論する場を設けていただいた。参加者は講師の歌野敬と受講生11名及び綿の栽培を協力していただいた農業経営者である。受講生は3分の2以上が社会人で、会社員、公務員、議員、起業家、会社経営者など、多様な背景の人々が集まっており、様々な意見、感想が得られた。全体として、「感動した」といったような、思いの詰まった言葉が多く発せられたことが印象に残っている。

中でも「すごい人間やってるな」という感想は、機械化に慣らされ、自分の手で何かものを作り出すことを忘れた現代人を端的に表現している。手の先の感覚によって、微妙な調節をしたり、頭と手を同時に使う作業は、今なかなかない。ものをつくる原点は、この微妙な感覚にあり、そこに喜びを感じることをこの言葉は表わしている。

さて、本稿を締めくくりにあたり、「スロー・クローズ」の社会的意義を証明するために、このワークショップを総括し、「スロー・クローズ」の社会的有意性を実社会に還元する具体案を提示する。

ワークショップの中で、歌野は、「スロー・クローズ」の教育的価値を強調した。そして、食育と衣の場合を比較し、食育がいのちの尊さの教育であるとするなら、衣はもう一歩進んで「つくる」ということ、つまり、労働の価値を再発見するためのいいツールとなり、労働が賃金化され、労働の本質が見失われてしまった現代において、人間にとっての本来の労働の回復という観点からすると、教育効果は大きいという。

「スロー・クローズ」の有効活用として歌野が提案するのは、高齢者による、スロー・クローズ・コミュニティの実現である。公民館などの公共施設を利用し、手紡ぎ手織り作業所を創設して、高齢者の手によって、衣を生産するという計画である。時間を持って余す高齢者に労働の喜びを与え、また、作業所には様々な危険のない道具があるので、子どもたちの恰好の遊び場ともなる。作業所を人が集う憩いの場所となれば、地域の活性化にもつながる。綿は、古布団を再利用すればリサイクルにもなる。都会においては、老人ホーム内に作業場を作ることができる。道具をそろえるにあたって、それほど

多くの投資は必要としない。課題は、この方策がどれだけ人の理解をえられるかということと、どれだけ協力者が得られるかだ。また、もう一つの問題は、手紡ぎ手織りの完成品が一般の目に触れるところになく、社会的評価が得られていないということだ。

今後の展開としては、作品の発表によって、「スロー・クローズ」の知名度を上げること、そして、糸紡ぎの普及活動の継続、教育機関のカリキュラムへの参入を視野に入れた活動を進めていきたいと考えている。そして筆者自身が「スロー・クローズ」実践の拠点となる場の創出を目標に次なる課題に向き合い、ソーシャル・イノベーションに連なるオルタナティブな生活価値観の構築に努めていきたい。

## 参考文献

### 洋書

- ・ Carlo Petrini, Buono, Pulito e Giusto, Einaudi s.p.a., 2005, pp106-139.

### 和書 (アイウエオ順)

- ・ イリイチ、イヴァン [渡辺京二・渡辺梨佐訳] 『コンヴィヴィアルのための道具』 日本エディタースクール出版部、1998年。
- ・ 大石尚子「衣の自給の社会的意義と可能性——実践活動『糸紡ぎ体験in大原』を通じて」『同志社政策科学研究』 第10巻第2号、同志社大学大学院総合政策科学会、2008年
- ・ 楢西光速・帯刀貞代・古島敏雄・小口賢三『製糸労働者の歴史』 岩波書店、1977年。
- ・ 金丸弘美・石田雅芳『スローフード・マニフェスト』 木楽舎、2004年。
- ・ ガンジー、マハトマ [森本達雄訳] 『私の非暴力1』 みすず書房、1997年。
- ・ ガンジー、マハトマ [森本達雄訳] 『私の非暴力2』 みすず書房、1997年。
- ・ ガンジー、マハトマ [片山 佳代子訳] 『自立の思想』 地湧社、1999年、21ページ。
- ・ 北山修編『共視論——母子像の心理学』 講談社、2005年、16ページ、74ページ。
- ・ 草郷孝好「アクション・リサーチ」小泉潤二・志水宏吉編『実践研究のすすめ：人間科学のリアリティ』 有斐閣、2007年、251-266ページ
- ・ シヴァ、ヴァンダナ [松本文二訳] 『バイオパイラシー』 緑風出版、2002年、13ページ。
- ・ シューマツハ、フリードリッヒ [小島慶三・酒井懋訳]

- 『スモールイズビューティフル』講談社、1986年。
- ・シューマツハ、フリードリッヒ〔酒井懋訳〕『スモールイズビューティフル再編』講談社、2000年
- ・トフラー、アルビン〔山岡洋一訳〕『富の未来』講談社、2006年
- ・ドリエージュ、ロベール〔今枝由郎訳〕『ガンジーの肖像』白水社、2002年。
- ・中岡 成文『ハーバーマス——コミュニケーション行為』講談社、1996年、158ページ。
- ・永原慶二『新・木綿以前のこ』中央公論社、1990年、203ページ。
- ・ハーバーマス、ユルゲン〔丸山高司・丸山徳次・厚東洋輔・森田数実・馬場宇瑛江・脇圭平訳〕『コミュニケーションの行為の理論』(下) 未来社、1987年、313ページ。
- ・初見基『ルカーチー物象化』講談社、1998年。
- ・ピカート、マックス〔佐野利勝訳〕『騒音とアトム化の世界』みすず書房、1971年。
- ・日比暉「実用面かた見た綿繊維の特性」『繊維学会誌』第62巻7号、2006年、p188-p192
- ・廣松渉『物象化論の構図』岩波書店、2001年。
- ・福井貞子『木綿口伝』法政大学出版局、2000年。
- ・ベック、ウルリヒ〔東廉・伊藤美登里訳〕『危険社会』法政大学出版局、2006年、29ページ。
- ・村山高『世界綿業発展史』日本紡績協会、1961年。
- ・柳田国男『木綿以前の事』岩波書店、1979年。
- ・山崎敬一編著『エスノメソドロジー入門』有斐閣、2004年。
- ・山口洋典「ソーシャル・イノベーション研究におけるフィールド・ワークの視座——グループ・ダイナミックスの観点から」『同志社政策科学研究』第9巻第1号、同志社大学大学院総合政策科学会、2007年
- ・やまだようこ編著『人生を物語る——生成のライフストーリー』ミネルヴァ書房、2000年。
- ・ライシュ、ロバート〔雨宮寛・今井章子訳〕『暴走する資本主義』東洋経済新報社2008年。
- ・ルカーチ、ジョルジュ〔平井俊彦訳〕『歴史と階級意識』未来社、1998年、19ページ。

## 雑誌・資料

- ・片山佳代子「ガンジー思想と私」『PeacsNetNews』214号 2006年4月10日発行、11ページ。
- ・片山佳代子資料集『ガンジーの糸車—ガンジー思想の今日的意義』2005年9月30日発行、9ページ。
- ・さとうさぶろう「服を通して「いのちの輪」をひろげる」『湧』第26巻第4号、2008年4-9ページ。
- ・TERRA MADRE 2008——FOOD COMMUNITIES-COOKS-ACCADEMICS (スローフード協会主催の世界フォーラム「TERRA MADRE」(2008年10月23日開催於：TORINO)での配布資料)
- ・『ヒューマンネットワーク虹』第141号(2008年5月1日発行)、3-23ページ。
- ・渡辺斉「特集・和綿のすすめ——日本の風土に適した繊維・和綿(アジア綿)は身体にやさしい素材」『染織α』No.303 2006年6月。

## 参考ウェブサイト：(確認日：2008年12月14日)

- ・『同志社大学大学院総合政策科学研究科ソーシャル・イノベーション研究コース』ホームページ  
<http://sosei-si.doshisha.ac.jp>
- ・International Cotton Advisory Committeeホームページ  
[http://www.icac.org/cotton\\_info/publication/press/2008/english.html](http://www.icac.org/cotton_info/publication/press/2008/english.html)
- ・Japan Chemical Fiber Associationホームページ  
<http://www.jcfa.gr.jp/f3-news/gyokai/070720.html>
- ・Organic Trade Association ホームページ  
[http://www.ota.com/organic/mt/organic\\_cotton.html](http://www.ota.com/organic/mt/organic_cotton.html)
- ・PERMACULTURE ACTIVIST ホームページ  
<http://www.permacultureactivit.net/intro/PcIntro.htm#History>
- ・PERMACULTURE CENTER JAPAN ホームページ  
<http://www.pocj.net/>
- ・Global Ecovillage Network ホームページ  
<http://ecovillage-japan.net/gen/about/index.html>